

# 満足大悲の信心海

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

普通は他力回向というんですけど、他力回向というのは一つの啓蒙的な意味です。人間によく解るように他力回向という。純粹には利他回向というわけです。こういうようなことに、親鸞は深い感銘をうけられたんだね。曇鸞大師の言葉から、曇鸞大師の言葉に深いヒントを得て、親鸞が利他回向を明らかにされた。やっぱりそのヒントは曇鸞大師に依ったんだから、それで、曇鸞大師が明らかにして下さったと。こういう具合に、『論註』にその功績をゆずっている。わしが見つけたというようなことを言わずに、曇鸞大師のヒントに依って自分はそう気がつかされた。こういう意味で利他回向ということが、数えればいろんな事があるかもしれないけれども、利他回向ということに尽くされる。その一点でもう『論註』というものが大きな意義がある。それはこの『大無量寿経』の本願、『大無量寿経』でも、まだ語っていない言葉だ。『大無量寿経』には、「至心に回向する」ということで、回向は出ているんですけども、しかし文字通り読めば「至心に回向して」と読む。衆生が回向するというのが本當の梵本上の読み方なんです。ところがその曇鸞大師のヒントに依って、「至心に回向したまえり」と、親鸞は訓点を改めている。あの訓点を改めたのはやっぱり『論註』のヒントに依って、『論註』に依って、經文を読み変えてある。だから經にも言っていないような意味を『論註』が言っているんですね。それだから『論註』の方が偉い、というのではない。そう言われて

みるというと、それが本当の經典の精神だ。本願の精神ですね。そういうことがある。これはまあ『論註』の話ですけど、それに対して『浄土論』の方は、広大無碍の一心を宣布された。まあ、一心は一心だけど、広大無碍の一心。つまり、仏が人間に成就した一心。仏の本願が人間の上に成就して信心となった。それだからそこに、本願の全体を信心が奪ってくる。強い言葉では奪う、主となる。こういうような意義が、広大無碍の一心にある。その一語で『願生偈』全体を尽くす。広大無碍の一心ということの他に『浄土論』はないんだ。これは衆生の上に、成就しても衆生を超えている。だからしてその信心は賜ったんだ、人間が所有することはできない。私の体験というようなことで、所有することはできない。つまりそこに、言ってみれば、体験主義を超えているんです、主観主義を。だから、本願が衆生となって衆生を救っているんです。そういうような意義を広大無碍の一心という。こういうことを言っているんですね。まあそれが今、始めの三行六句に出ているんですけど、これがむしろ『願生偈』全体なんだ。始めだけが一心じゃない。その広大無碍の一心だということを、あとが証明していくんだ。こういうことをお話ししたですね。

その時に、「広大無碍の一心を宣布して、雑染堪忍の群萌を開化したまえり」、こういうふう言葉が付いている。「広大無碍の一心を宣布して雑染堪忍の群萌を開化す」、それで一切衆生を、教えて下された。天親菩薩は、群生を開化しようと思って一心をおこしたわけじゃない。己れを空しくして、本願を頂かれた。しかしその頂かれた信心が、一切衆生を救うんです。別に天親菩薩が救ってやろうと思って一心をおこしたわけじゃない。その天親菩薩を他人事に聞けば、天親の一心は天親だけの話だと。他人事に聞けばそうだけど、聞く自分はどうなんだということがある。親鸞はそれを他人事に聞かれなかった。この親鸞を救うために一心をいただいて下された。何も天親菩薩に聞いてみたところで何百年の後に親鸞が生まれるというようなことを天親菩薩は考えてはいはしない。親鸞から見れば、この親鸞、今ここにおける親鸞のために一心を頂いて下された。こういう具合に、「我が身にひきかけて」というのは

そういうことを言うんでしょう。一心をおこしたんだ、という意味だけど、おこして下されたんだと。こういう具合に、天親の一心が、個人的なものじゃなしに、歴史的な意義をもっている。つまりそれは『大無量寿経』を頂かれた一心だけど、『大無量寿経』を頂くと同時に『大無量寿経』の用はたらきをしている。こういうわけだ。このようなことを、「雑染堪忍の群萌を開化したまえり」と言っているわけです。問題はその一心が、雑染堪忍の衆生、群生の上に開かれたということです。仏心でしょう。広大無碍の一心を群生の上に明らかにされた。これが大事なことでしょね。そしてその群生を、救われた。群生の上に広大無碍の一心が出てくると、その一心が群生を救う。

一心ということは三心に対して一心というんだけど、三心というのはみなさん知っておられるように、「至心信樂欲生我國」と、ちょっと三に見えないが、『觀經』に照らしてみるとやっぱり三心です。この意義が備わっているということが言えるんでしょう。「至心・信樂・欲生我國」ですね。それはやっぱり、三心さながらに一心だ。三心を頂かれたのが一心だ。こういう具合に、三心と一心と二つが別じゃない。むしろ一心というものを成り立たせるために三心というものが説かれた。だからして、三心は願心です。如来の願心です。それが一心として成就する。そうするとやっぱりそこに三すなわち一であって、二つじゃない。三がそのまま一なんです。つまり如来の本願というが、如来におけば願心ですけど、それを衆生の上に成就すれば、それを信心という。願即信だ。こういうような意義があるわけです。だからしてそうしてみるとやっぱり信樂ということになる。三心だけど、三心を総合しているものは信樂です。至心が済んだらその次は信樂、その次は欲生という具合に、次々一つずつ発していくのじゃない。至心において信樂が成り立つ。信樂そのものが欲生の意義をもっておる。信樂が済んでからまた別に欲生というものがあるわけじゃない。信樂そのものに欲生の意義をもっている。こういうように結局まあ、真ん中から押さえれば、信樂です。至心をうけて信樂が成り立つ。その信樂のところにもう欲生を孕んでいる、欲生ということを契機として持っている。こういうようなことになる。だから、天親菩薩の一心というのは信樂、こう言ってもいいわけです。信樂の樂という

字がもうすでに欲という意味です。だから信楽、信心にもう欲生というものを孕んでいる。こういう意味で、楽という字がついている。楽欲という意味ですね。楽という字は、楽しむという意味もあるけど、願うという意味もある。欲というのは願ということですから。

それから至心というのは、まことという意味ですね。言葉からいうと文章の自然の勢いからは二つですね。至心信楽・欲生我國、それを『観経』に照らしてみると、至心と信楽と欲生と三つの意義をもっている。至心というのは、普通に言えば、心を至すということです。心を至して信ずると、こういう意味であって、副詞ですね。信ずるという動詞を形容している副詞です。心を至してというのは、信ずる態度を表現したということになる。経文を文字通り読めばそうだけど、そうでなしに、善導大師の『観経疏』というものを通してこれを見てくると、至心は真実という意味になる。ここにも真実功德ということがあります。「大乘修多羅真実功德に依って」という、この真実という意味だ。そういう具合に解釈している。この心<sup>こころ</sup>というのは、普通に言う意味の、一心とかなんとかいう意味の心じゃない。この場合は、実<sup>じつ</sup>という<sup>こと</sup>のような意味ですね。心<sup>こころ</sup>というのは種・実<sup>じつ</sup>という<sup>こと</sup>のようなね。種<sup>しゅ</sup>というのは、たねと<sup>こと</sup>のような意味なんだ。種<sup>しゅ</sup>とか実<sup>じつ</sup>とか、たね<sup>たね</sup>という<sup>こと</sup>のような意味ですね。つまり、<sup>こと</sup>ころという意味じゃない。核心<sup>こゝん</sup>なんだ。そのものの中心。セントラル<sup>セントラル</sup>という<sup>こと</sup>のような意味だ。ものの核心をあらわす。あなたがた知っているように、『摩訶般若波羅蜜多心経』という<sup>こと</sup>のような場合の「心」、あれは<sup>こと</sup>ころじゃない。中心<sup>しん</sup>という意味だ。心臓<sup>しん</sup>という<sup>こと</sup>の意味なんですね。色々分別したりする<sup>こと</sup>をあらわしているのじゃないのであって、われわれの心臓をあらわしている言葉だ。だいたい漢民族の心<sup>こころ</sup>という<sup>こと</sup>のは心臓のかたちなんです。その意味で、やはり人間の中心をなすものは心臓だ。その意味で、種<sup>しゅ</sup>とか実<sup>じつ</sup>とかいう字があそこにある。普通の<sup>こと</sup>ころという意味じゃない。だけど本願の三心という場合の心<sup>こころ</sup>は、これとは意味が違う。欲生心とか、信心とか、<sup>こと</sup>ういう場合。だから字訓釈の「真実誠種の心」というこの「心」は、これは普通の<sup>こと</sup>ころですね。真実誠種の心<sup>しん</sup>という場合は、これは信心の心<sup>しん</sup>という<sup>こと</sup>。けどさ

っきの「至心」の「心」は中心の意味、これが心ですね。真・実・誠、これはみんなまことという意味ですね。真も実も誠もまことですね。さらに種という字がある。これがまあ言ってみれば至心、まことというのには至という意味ですね。それから至心の「心」は、これは種という。いわば「至心の心」、この心はこれは、信心という場合の心ですね。こころのほうは、Cittaという字の翻訳なんです。心という場合、我々が分別する心という場合は、チッタ。こちの心という字はhrdayaという意味で、原語からいくと字が違うわけです。心を至してと読めば、こっち(citta)になってしまいますね。そういう具合に、至心という場合の心というのは、中心というような意味ですね。果物の中心になっている、種は。核心や、一つぶのね。Kernpunkt というような意味をもっている。そういう具合になっている。

だからそのまことということが、これが一番大事だという。人間も努力すれば真実になり得るといふのじゃない。だから如来を真実というんだ。人間に無いものであると。人間も努力次第では、真実にもなれるというのではない。真実功德、真実というのをやかましく言われるのは、こういう意味がある。それだから、みなさん知っているように、「唯仏是真」という。如来を真実という。或いは『歎異抄』に言われているように、人間は、「そらごと、たわごと、まことあることなし」と。あの「まこと」や。「ただ念仏のみぞまことにておわします」。如来を真実というか、或いは、念仏を真実というか、どちらかなんだ。『浄土論』では如来を真実と言っている。如来や浄土の功德を真実功德と言った。そういうのが曇鸞大師の解釈です。親鸞は、更にそこを推して聞法していつて、如来が真実ということもあるけど、更にもっと徹底すれば、念仏が真実なんだと。我々は、仏は真実だ、その仏を念ずる、という具合に仏と仏を念ずることと区別するけれども、そうではない。念仏というところに、生きた仏がある。向うに飾ってある仏さんを言っているんじゃない。我々の生臭い口から出る念仏が、それが如来なんだ。あくびして出る念仏でも、それが如来なんだ。そういう具合ですね、如来が人間となって、人間に名告る如来なんだ。だから念仏が、仏心なんだ。

念仏以外に、念仏の向うの方に仏さま、仏心を考える。多くの場合、そういう具合に考えているけど。向うに如来があってそれにつけた名前が仏の名だと、こういう具合にして考える。そうじゃない、仏の名が仏なんだ。名号といったら仏の名、仏につけた名だと、そうではないんだ。仏につけた名なら南無はないんだ。親鸞において、本願の名は、南無阿弥陀仏を仏の名という。阿弥陀仏を仏の名だというのなら、仏さまにつけた名前になるんですけど、記号や。そうじゃないんだ。南無阿弥陀仏が仏の名なんだ。つまり、阿弥陀仏が人間に名告ってある。人間に南無している。阿弥陀仏が人間に南無して、人間を南無せしめる。それが用きです。如来の名というと名詞みただけど動詞だ。用く如来なんだ、念仏は。人間となって、人間を如来に転ずる用きが、仏の名なんだ。こういうのが御開山の解釈でしょうね、徹底して言え。だから一応如来の徳を真実というけれども、再応言え、如来の徳を南無阿弥陀仏に回向しているのが、名前なんだ。回向ということがついてくる。如来の徳があってもそれが衆生にわたらなくては困る。如来を与えているんだ、名号を選んでね。南無ということ、一つ開いて阿弥陀仏から南無を開いて、その南無に阿弥陀仏の真実の功德全体をそこに与え込んだ。こういうような意味だ。そういうのを選択回向の名号という。こういうことですね。だから本願の「本」というのは何を本というかと、念仏を本とした。念仏を本とする願を建てたから本願。だからして、本願に先立って名号ありと曾我先生は言われる。名号というところにもう本願が成就している。本願が完全に自分自身を表現している。つまり、本願というものが、完全に成就した本願を名号といっているんです。

道元禪師に「現成公案の巻」というのがあって、現成公案ということが道元禪師にある。公案ということは、臨済の禅でも皆言うんですけど、現成公案は道元の独特の思想や。親鸞でも、もっと詳しくは、今現在成ということをいうんです。「彼仏今現在成仏」と。今現在成ですね。そういう具合に詳しくいてありますね。略していえば現成。親鸞教学にはやっぱり今現在成という。善導大師の言葉ですけどもね。本願成就をあらわすんだ。本願が成就してい

る、その成就とはどういう意味かというと、現成しているという意味だ。今、現に、在す。今、現在し、成就しているという意味だ。現在、現に在るものにまでなっているんです。こういうような意味が、ちゃんと詳しく出ている。

現成公案ということは、道元禪師の独特な表現である。道元禪師は新しい日本語を作られた。現成公案ということですね。こういうような概念が出てくると、日本語で思索ができる。哲学とか宗教というような思想に堪えるような日本語になる。だからしてその思想が非常にすばらしい思想だということは、どこにそういうことがあるかといえ言葉にある。だれでも使うような言葉で語ったような言葉には特性がない。だから署名を見て、ああ、あの人の文章かというのが分かる。署名を見なかったら誰の文章か分からない。みんな同じになる。人のまねして書いているから。ジャーナリストの言葉です。はやる流行語で書くとかね。そんなのは、署名がなかったら分からない。道元や親鸞の言葉は、見ればああ親鸞の言葉だとすぐに分かる。日本語を作ったということで、道元と親鸞というものがすばらしい。思想の言葉なんだ。哲学ということを非常に狭い意味で考えずに、広い意味で哲学ということと考えるとするならば、専門家の哲学ということという間違いが起こる。しかし人間として考えることを哲学、そういうなら、道元、親鸞というようなものが、始めて哲学に堪える、哲学的思索に堪える言語を作った。借りものでない。日本人がそれで自ら哲学することのできる言語になった。これは非常に大きい。そういうことは今日でも言える。あの現成公案という言いがすね。

だから親鸞から言えば名号というのが現成だ。現成公案というのは現成本願だ。現成本願の名号なんです。名号というところに本願が成就している。本願が成就したら本願が消えたかというところじゃない。成就した本願になる。本願が成就して名号になったといえ、名号になるまでは本願があり、名号になったら本願が消えたかというところじゃない。本願によって名号が出来たら、逆に今度は名号によって本願を成就する。本願によって名号を成就するとも言えるけども、名号によって本願を成就する。それはどういう意味かというと、成就した完全円満な本願になる

んです。本願が消えるのじゃない。本願が成就すれば、本願が消えるのではなしに、成就した本願になる。完全円満な本願になったのが名号だ。本願を押さえれば、それが名号。本願の体、当体。言葉はそういうふうを考えねばならない。思想が常識になってしまふ。本願と名号とを別に考えるような頭は常識や。本願は形がない、名号は形だ。そうすれば形のない本願が形をとった。とってみれば、実は形が形のないものそのものなんだ。形こそ形の無いものそのもののものだ。こういうような意味が出てくる。

真実ということば、まあそういうことになるね。一応如来だけでも、ただ如来が真実と言ったら、如来は静止的です、じっとしている。それは違いないけど、そういう如来は衆生の方に来ない。そうじゃない。如来が真実なんだけど、その如来の真実を衆生に成就した。そこに、そういうために、名というものが出てきた。如来のままでは人間に分からんです。さっき言ったように、真実というのは如来で、人間には無いんだ。人間も努力すれば真実になりうるのじゃない。だからして、真実というようなことは夢にも描けないものなんだ。描けるものじゃないんだ。夢にも描けないものだ。人間が夢に描けば、それはイデーということになる。イデーというのは理念のことだ。考えたまことになる。まことそのものじゃない、考えられたまことになる。腹はふくれない。なんぼまことであっても、考えたまことでは腹はふくれない。現実にならんのだ、理念になって。現実にならんまことというもので、現実のまことにならない。つまり現成しないわけです。だから静止的な如来が、南無というものを開いて、開いた南無の中に如来全体を与えてくる。これを選択回向というんですね。名号を選択して、それをもって回向するんです。そういう時に一つの大きな用きになる。用く如来やね。人間に名告って人間を如来に転ずるような用きになる。動詞になる。その動詞を行というんです。行、行いうでしよう、誰でも、行信と。その用きを行という。如来は静止しているけど、その静止した如来が用く場合、名号という。用く如来です。その名号というものによって、それはつまり如来をあらわし念仏をあらわすけど、結局それによって、本願のまことをあらわしているんですね。まことというのは、本願が嘘で



なかった。一切衆生をたすけずにはおかんという願心が、嘘でないということを証明している。人間の考えたことは何も当てにならない。人間は考えてできないというと、明日に延ばすんです。いつでも理想です。現実というものを、理想でもって現実を理想化しようとする、荷せれないです。そうかといって、嘘で満足できないだろう。今はできないけどそれは明日に延ばす、それを理想という。だから人間のまことというものが、人間の上でまことを考えれば、理念とか理想になってしまう。現実にはまことではない。現実にあるものは嘘ばかりだ。それじゃたらんから、まことを描く。その描いたまことで、現実をまことにしようとする。そういうようなのは皆焦りでしょう。そういう具合にして理想を描いて、現実によらされると理想が崩れる。崩れると又、理想をつくる。つくって現実にもっていかうとすると、なお、崩れてしまう。そういうことを繰り返して、今度こそは、今度こそは、と夢を見るわけです。そういうことを繰り返して、いつでも、現実の悲哀というものを味わっているんですよ。諦められないから。昨日まで繰り返してきたけども、もういっぺん、今一度ということ。それで生きているわけである。もうこれだけ繰り返していると覚りそうなものだけど、覚れない。ちょうど株で損した人間が、損すりや一層、株をやるようなものだ。諦めきれない。だから、心をまことにするというのは、普通の言葉じゃないんですね。本願のまことを信ず。まことに疑いがないのを信樂という。本願のまことに疑いがないのを信心という。至心信樂ということ。真実信心ということ。

それで親鸞は至心を体として信樂をたてると言っている。つまり言ってみれば、名号に信心を立てる。名号を体として信樂をたてるというのは、名号に信心を加えるんじゃない。名号に信心を付け加えるんじゃない。このごろ出遇うということ言うが、名号に出遇うんじゃないかな。ああ、これが名号だったかと、こういうように。それを信心という。別に加えたわけじゃないんであって、名号に疑いが晴れる。名号に疑いが晴れる。名号に我々の、分別が破れる。つまり、我々の考えが、ただ思いに過ぎなかったと。いつでも繰り返してということに気が付いた時に、まことでないものに触れた。まあ、そういうような形ですね。承認することですね。判断することじゃない。ああこれ

が真実だなど、判断することじゃないのであって、承認すること。承認というのは、文句のいらぬことだ。文句のいらぬことですね。文句のいらぬことを承認したんです。これがまことであつたかと承認した、それが信心だ。ああこれがまことなんだと考えたわけじゃない。考えたまことは、考えられたまことにすぎない。まことの現実、心が消えるわけだ、主観が。そしてまことそのものにぶつかる。真宗ではいわないけれども、体当たりや。承認というような意味でしょうね。つまり、心に持つてくるんじゃない、考えの中に。そうじゃない、心を超えるわけです。超越するわけです。人間の心が、本願の事実超越していくわけです。それが承認というようなことですね。或いは、頷くというようなこと。頷いたんだ。頷いたのは判断したんじゃない。これはまことだと、判断したんじゃない。まことに頷いた。これがいわゆる基礎体験ですわね。こういうものは経験の基礎ですね。だからして、頷く本願だ。本願の現行、現実というものがなければ、信心を立ててみる場所がない。何故我々は自分の心を捨てないか。駄目なものだとわかってもお、わらのような細い縄でも、捨てない。自力無効だとわかるんです。自力無効、我々やつてみたところで大したことはできないと、こうわかりながら、じゃ自力を捨てるかという捨てない。無効だと知りながら、捨てようとしなない。よう捨てんですわね。無効だと思ふけど、それを捨てない。そうでしょ。それは、無効だと思つてゐるんじゃないんですわ。だからしてそういう場合は、本願を考えてゐる。別に本願はあやしいぞ、と疑つてゐるわけじゃない。だけど、本願を考える、その考える心を捨てない。心で本願をとらえてゐる。こちで本願をつかんでゐる。そうじゃない。向こうが我々をつかむんです。こっちはただ素直に頷くだけ。つまり、承認するとか、頭が下がるとか。下げたんじゃない、下がつてしまふんです。そういうような意味なんです。

我々が本願に頷く、本願はそれを待つてゐるんじゃないか。たすけようと。けれども、頷かない衆生をたすけるわけにはいかない。人間が二つの心を捨てない間は、いかに救つてみようとと思つても、救つてみようがない。だからして、衆生というものが本願に目覚めるといふことを待つて、本願は衆生を救う。大体いうと、信ずるといふのは人間

が求めるものじゃない。さっき言ったように人間が求めるのは欲ばかりであってですね。「本願にはただ信心を要とする」と、『歎異抄』にありますね。信心為要、まあ漢文で書いたらこうです。本願には信心の他のことを要としているわけじゃない。努力なんか、本願は人間に要としているわけじゃない。信ずるということだけを要としている。要というのは要求でしょう。要求や。努力を要求しているんじゃない。信ずるということを要求している。要求というのは待っているわけだ。普通はそう考えない。信心は我々が必要だと思っているんです、たすかるから。キップだと思っていた。信心をおこして本願にたすけられて、というように功利的に考えている。人間に必要なとか。そうじゃないんであって、本願が要求しているんです。たすけてくれというのは、本願の方なんだ。人間の必要とするものは欲だ。純粹に、切々たる要求というのは、切々として求めているものは本願の方が求めているんです。人間の方は求めとりやせんです。ケロッとしている。だからして何故必要とするかという、どうも、救うには救うけど、そこには救うということがあるけれども、救うためには、目を覚まさなければ救いようがない。目を覚ますとは自覚です。自覚というものがなければ救うということはない。これが利益というような言葉で、その救いを表している。利益、おたすけというようなね。利益という場合は、やっぱり自覚が利益。自覚した結果が利益を得るのじゃない。自覚するということが利益なんだ。最高の利益なんだ。幸福になるというようなことが利益じゃない。だからして、幸福を求めている人は、救われていないからだ。もう救われる必要がないという人が、それは救われた人なんだ。その、わがままな要求を撤回しますと、こういうのが本当の生きた信仰です。浄土に生まれなきゃ死んでも死にきれんというような人は、それは救われていない。ありがたい、ありがたいというようなことは、みんな救われていない人が言うことなんです。

そういう意味で、念仏というものに気がつかなかったと。念仏があることにね。念仏というものは本願の方から我々に出かけてきている。向こうの方から我々に要求してくる。向こうから始まっているんです。ところが、それが気

がつかなぎゃこっちから出かけるより仕方がない。こっちから出かけるのを迷いと言うんだ、と道元禪師が言っている。衆生が仏に出かけるのを迷いという、仏があゆみを運んで我に來たのをさとりという。これは親鸞聖人じゃない、道元禪師がそう言っている。仏の方が歩みを運んでこっちへ来ているというのを道元禪師はどう言われるか知らないけれども、親鸞の教学はそれを名号という。だからして結局迷いは、念仏をいいかげんにあわかったと思っているところと間違があるんじゃないでしょうか。名号というものをいいかげんに考えている。十束一絡げに考えている、そこに迷いがある。根源の間違いがあると思う。名号というものは、愚痴無知の百姓が称えている念仏だと、十束一絡げ、安ものだと、こういう所に間違いがある。腹の底から念仏したところで、誰も博士をくれやしない。念仏というようなことを考えてみたところで、誰も博士くれやしない。安物です。それほど念仏というものは世界中から馬鹿にされている。一番安物じゃないかね。念仏というのは。そういうところに根源の間違いがあるんですよ。だからして、念仏を馬鹿にして信心ばかりを大事にしている。信心、信心といってやかましく言われている。だからして念仏のない信心を観念論という。主観です。こういうようなことをこれまでの会で、だいぶお話してきました。

だからここに、眞実功德に依って一心に歸命するという。大乘修多羅眞実功德に依って一心に歸命と。名号が一心というものを立てる依りどころですね。名号というものがなければ、一心を我々で立てるより仕方がない。我々の心の上に立てるでしょう。我々の心を何とかして一心不乱に立てるより仕方がない。けれども、我々の心を一心不乱に立てても、我々の心は、散乱亂動するのが心の本質なんです。一番当てにならんのが自分の心です。その一番当てにならない自分の心の上に、動かない心を立てようというのは無理なんです。だからそういうところから、「そらごと、たわごと、まことあることなし」と。人間の心というものは当てにならんのだと。そういう人間の心を、細いわらのような当てにならん心を捨てようとしな。これは妄執ですわね。当てにならんということを知っても捨てようとし

ない。それほど人間の妄執というのは強いものだ。夢が覚めそうなものだけど、覚めんです。自力というものは、成り立たないものと、それならそれを早く覚めて他力をたのむといきそうなものだけど、そうはいかん。おそらく、臨終一念の夕べに至るまで捨てないでしょう。明日は捨てるということはないだろう。「微塵劫を超過すれども出離その期なし」という具合に親鸞は言っている。今駄目なんじゃない、永遠に捨てれないのだ、未来際を尽して捨てれないのだ、こう言っている。「出離の縁あることなし」、と言っている。そういう自覚、そこにはじめて動かない心をたまわるといふことがあるんです。出離の縁あることなしと。永遠にたすからんといふことは人間の歎きじゃない。人間はよう歎かんものだ。如来の心、悲しみだ。人間は悲しむことはできん。人間が悲しむというのはね、不平不満しかないんだ。人間にできるのは。不平不満が人間にできる悲しみである。わがままな、ぜいたくな悲しみです。本当に無になつて痛むといふことはないんです。身勝手な悲しみです。それは悲しみとは言えない。

信楽といふことはそういう具合に、念仏によつて念仏の心に目覚める。念仏は如来の言葉でしょう。如来の言葉によつて如来の心に目覚める。願心に。そういう所に信心といふものがある。そうすると、その信の上に願心が涌出してくる。そして信を發した衆生を撰取する。それを光といふんです。願心が光輝くんのだ。こういうことがここに説いてある。不可思議光如来というように。一心といふところに、本願が成就して、そこに南無不可思議光如来が涌出してくる。如来が輝くんのだ、本願が成就して。尽十方無碍光如来は本願成就の姿なんだ。そして一心の衆生を、不可思議光に撰取すると。撰取されて、そこに現生不退を得る。一心が終わつて、次に浄土に往生しなければ満足できないというのじゃない。一心といふところに、もう満足する。こういうことが「歸命尽十方不可思議光如来」ということであらわされている。一心が一心自身に満足する。一心を發して救われるんじゃない。一心のところに、本当の広大の救いがある。こういうことを、ここで表現してあるんです。

この信楽といふことについて、これは「信巻」ですけども、詳しい話はできませんけども、親鸞が信楽といふもの

を解釈されて、信樂、信樂と言うけど、信樂とはどういうことだ、どういうことを言うのかというと、「如来の満足大悲・円融無碍の信心海」という。信ずるといふようなことはどういうことか。こんな表現は他にないんじゃないか、「如来の満足大悲・円融無碍の信心海」。ちょっと説明できにくいけどもね。ここに書いてあるように、海なんだと。信心海。胸の中にあるようなものじゃない。我々の心でつくった信心は胸の中にある。それは小川みたいなものだ。海といったら、万船の帰するところ。我々の中に描いたものなら海じゃない、谷川や。海は我々がその中に入っているものだ。大海です。大海は我々の胸の中に入らない。我々が大海の中に入っていく。信心が信心を発した衆生を包むんだ。まあそういうような定義というのは他にないんじゃないかね。それで廣大無碍という。言ってみれば、ありがたいなんていうことを言っとる暇がないんです。そういう具合にして、向こうに信心を置いて眺めている暇がない。つまり、こういうところに本当の領くというようなことがあるんじゃないか。言語道断、心行処滅ということをいう。これは普通の世間では、言語道断の奴だと叱る時に言いますけども、言語の道が断えて心の用きが滅するんですね。言葉も心も断えたという意味ですね。言うにも言えないし、心に描くことができない。言語の道が断じて、心行の処が滅すると。心も、分別を起こしてみようがない。分別を起す余地を与えないという。言葉もはつきりしている。わからないから言えないのじゃない、わかりすぎて言えない。

念仏で目を覚ますというところに、仏の覚りが人間に成就する。そういう意義をもっているのが、信。こういうわけです。そこに、如来の大悲が満足するという。大悲心というのは、さっき言ったように痛みなんです。「無有出離之縁」、たすからないものだということは、ちょっと人間的に考えると、たすからないものだということを人間的に考えると、絶望ということになるわね。絶望的なものだ。そういう具合に、ちょっと人間的に考えると、たすからないものということは、出離の縁がないということとは絶望的なものだ、こう考えられるけども、やっぱりそれは人間の心じゃないか。絶望なんかするのは人間の心じゃないか。仏の心は絶望しないだろう。人間というものは、つま

らない、阿呆だというようなことを言ってるんじゃないだろう。如来の心というのは。どんなに墮落しても、それを信頼する。あんな奴とは思わなかったというのは如来の心じゃない、人間の心じゃないか。昨日まで信用していたけど、こんなひどい奴だと、こういう具合に言うのは人間の心である。人間は、どんな墮落しても如来のふところを出ることはできないのだ。墮落したから、あかんと言うのじゃない。墮落したから痛むんだ。それは見込みがあると言うんじゃない。だから、如来の心というのは墮落以上、絶望以上なんだ。そういうのを大悲という。本当の意味の痛みだ。つまり言ってみれば、人間というものがこれだけ深い自覚になっているんです。人間というものはどういうものかという、目がある、鼻があるというような、今のヒューマニズムとか民主主義でいうものじゃない。如来の痛みとして存在するものを衆生という。それが本願に照らされた人間の自覚なんだ。人間というものは、如来の痛みとしてそこに存在している。こういう自覚、たまわった自覚や。それが如来の大悲でしょう。如来の中にあるその大悲が、如来の中にあるなら満足しない。それが衆生に響いた。それに衆生が気がついた。そこに大悲が満足するんだ。如来の心が衆生の中に満足したのを信心という。こんな信心というような、こんな定義というのは、あなたがた初めてでしょう。もっと簡単に考えていた、信仰というものをね。

「円融無碍の信心海」という円融無碍ということは、妄想、妄念の衆生と円融無碍なんです。こういうのが仏凡一体という意味でしょう。凡夫の妄念、妄想をやめて如来の心が満たすのじゃない。妄念、妄想のままに如来が満たす。妄念、妄想の全体が満足になる。痛みのね。妄念、妄想をはねのけて満足するんじゃない。妄念、妄想の全体を満足する。大悲に満足する。これを信心という。こういうように言っているんですね。こんな簡単な説明じゃ、ちょっとわからないかもしれないけれども、信心というものがどういふものであるか、念仏ということもどういふものであるか、どうもそこらのはっきりしていないのでないか。ああ、そういうものは済んだと、第二章へいってくれというようなものじゃない。その第一章で、とうにはや、去年、おとしから聞いているというようなものじゃない。やっぱ

りそれは、よくわからないのでないだろうか。聞いてもわからないでしようか。名号というようなものは。

『阿弥陀經』の一心は、人間の妄念、妄想を取って、妄念、妄想を否定して、そこに一心を確立しようとする、これが『阿弥陀經』の一心。自力の一心や。そうじゃない。本願名号というものに目を覚ませば、妄念、妄想の全体が一心になるんだ。我々が努力して、妄念、妄想を克服するんじゃない。こういうようなところに円融無碍と。如来の心が、衆生の妄念、妄想の全体と円融する。無碍だ。ちょうど川が海の中に注ぐと、川の水が海と円融無碍になる。だから川は、各々で、善の川もあれば、悪の川もあるけども、大海に注ぐと、一味の、塩辛い、一味の大海の水となる。転成する。円融無碍です。川の水が大海の水と一つ。川の水は、もう川の水のままじゃない。塩辛い一味の水となつて、つまりいってみれば、アウフヘーベン (aufheben)。その人間の妄念、妄想が、それが、願心によつて止揚されていく。止揚、aufheben ですね。止揚されておる。だから、妄念、妄想をやめてではない。妄念、妄想を消し失うことなくして、しかも質を一変する。性質を変えるんだ。凡心を全く絶対反対の仏心に質を変えてしまうんだ。質の転換である。弁証法といつても、いろんな複雑な考え方があるんですけども、ヘーゲルでいえば、高める。高めるとは、A・Bという矛盾する要素を高めてCに総合する。A・Bを捨てずに、しかもそれをCに総合するというようなことをいう。マルキシズムにも使われた。唯物弁証法。弁証法というのは、ヘーゲルで非常に有名になったんですけどもね。もっと言えば質的弁証法ということがある。信仰の弁証法。質的弁証法やね。量的な弁証法じゃない。質的弁証法。信仰の弁証法。キルケゴールなんかね。ヘーゲルの弁証法と区別して質的弁証法と。質を一変する。質を変えるという意味。つまり川の水を否定せず、そして質を変えて海の水とする。だからそこに、海は死骸を宿さない。生殺しでそこに残っている。質を変えている。妄念、妄想を如来の信に変えてしまう、質を。しかし妄念、妄想を捨ててじゃない。それを否定することなく包んでいる。しかも一変させる。こういう意味だから、やっぱりそこに弁証法がある。弁証法というか、ダイナミックなものです。こっから妄念妄想を捨てて、別の所から如来の心を、輸入



してくるのではない。それを分別という。そうじゃない。消し失わずだから。妄念、妄想を消し失わずして、しかも如来の信心に一変すると。妄念、妄想のありたけが願心になってしまふ。そしてその妄念、妄想の衆生を救う。摂取不捨する。その妄念、妄想に無碍なんだ。それで尽十方無碍光というんです。人間は如来を碍けていても、如来の心は人間に碍げられない。こういうことがある。そういうことは理屈で言うんじゃない。頭では否定していても、わからなくても、頭ではわからんけどわかってくる。頭というもので否定していても、その頭の壁というものに碍げられずに心の内面に響いてくる。無碍じゃないかね。よくわかったという。わからんままでよくわかるんです。本読んでもっと勉強して、明日の晩までにわかるようにするとうようなそんな話じゃない。わかる人間もわからん人間も平等にわかる。それが共鳴というものじゃないか、同感することだ。同感するのは頭でわからん。けど、心の底から領いたというようなことは、これは嘘でも何でも無い、事実でしょう。こういうのを無碍というんだ。それを不可思議というんだ。不可思議光だ。

これを読んでみると光という。『願生偈』というものによって經典を照らす。しかしまた逆に、『願生偈』というものによって經典を照らすと同時に、『願生偈』はどうかという場合、經典によって照らす。こういうことがあるんですね。だから如来でも、浄土でも、願心莊嚴として『浄土論』は語っているんですけど、それを本願というものによって照らしてみると、そうすると十二・十三願。「正信偈」でいうと「帰命無量寿如来 南無不可思議光」と。あそこでもやっぱり『論』『論註』の言葉を、更に元の經典の言葉に返して明らかにしてある。南無阿弥陀仏ということなんですけども、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」と。「帰命無量寿如来」とあって、南無が先になっていない。南無の意義が帰命だから帰命・南無じゃおかしいんじゃないか、南無・帰命といかなければならないところじゃないか。こう言っているけども、帰命と言うのは『浄土論』の帰命尽十方です。南無というのは南無不可思議光、『論註』です。それから、『論』『論註』によってそれを明らかにした。『論』からいくと「帰命十方無碍光如来」。『論註』

は更に、同時に同じものを南無不可思議光という。同じものなんだ。不可思議光は、積極的にあらわす。無碍光は消極的にあらわしている。碍げられない。消極的にあらわしているんですね。不可思議だと、積極的意味をあらわしてくる。けどそれをもっと根源に、それによって『大無量寿経』を照らしてみると、そこに十二、十三願というものがある。そこに光明無量、寿命無量という願がある。それで、無量寿如来、不可思議光と、こういう具合にやっぱり經典によって『論』や『論註』を照らすともに、『論』『論註』を經典に還元していこうと。いわゆる經と論との傳承に則して南無阿弥陀仏ということを立てて、南無阿弥陀仏によって正信、信心を表白してあるのが「正信偈」でしょう。ここでもそうです。やっぱり天親菩薩の信仰告白は、帰命尽十方無碍光如来という形で一心を表白してある。この『浄土論』というものによって、親鸞は「真仏土巻」というものをつくられたんです。『教行信証』の中の「真仏土巻」。それはやっぱり十二・十三願という二願の意義を『浄土論』によって明らかにされたのが「真仏土巻」だ。こういうものですね。

真仏土ということはどういうことかという、形のない仏、形のない浄土ということ。それが真仏土ということ。形のない如来、形のない浄土。そういうことがだいたい帰着点なんです。それでそこを見ると、「仏はこれ光の如来」と。光の如来だと書いている。真仏土というのはこれ光。ところが真土というのは、「土はまた無量光明土」と。仏も無量光明、無量、無辺、無碍の光明。土もまた無量光明土。經典に返すにしても、光ということだけで仏も浄土もあらわしている。經典から照らすとそういうことになる。『浄土』の方は二十九種莊嚴ということがある。二十九種莊嚴の中に、ずっと読んでいくと、「仏恵明浄日」と、こういうのがあるんです。『願生偈』の国土十七種莊嚴の中に、「仏恵明浄の日は、世の痴闇の冥を除く」ということがあるんです。国土十七種莊嚴というんですけど、その中に、光の徳ですね。光ということをあらわしたんです。他にもまだあることはありますけどね。「浄光明満足 如鏡日月輪」、その時に浄光明と、光明という字が出ています。しかしこの時は光明で譬えたんです。まさしく光明の徳

をうたったんじゃない。光明満足していると。満足というのは丸い。浄土はどういう形をしているかというと、安樂浄土というのは形はどうだというと、満足という形なんだ。不平がないという形なんだ。それが浄土の形なんだ。円いという。浄土は三角や四角じゃない。円いという形で浄土の徳をあらわす。円いというのは、一点の不平不満がないという意味。現前の境遇に満足しているのを浄土という。それから、「無垢の光炎熾にして、明浄にして世間を曜<sup>あき</sup>かす」というときも、やっぱり、「無垢の光炎」という光が出てきますが、これは浄土の色や。浄土はどんな色をしているのかと。すると、熾んだという。熾んな火ようだ、燃えあがる火のようだ。つまりやせ細っていない。悲観してしょぼんとしていない。これが浄土の色というものだ。こういうような光はあるけども、それは光そのものじゃないんで、炎の燃えあがるということですから。光が満足しているということの方が主なんです。まさしく光そのものを説いてあるのが光明功德ですね。これがやっぱり非常に大事な点です。『教行信証』では、「総序」に「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」と言っている。これはここによっている。痴闇冥というのは無明でしょう。無明を破ると。そこに「恵」という字がある。

智恵というが、智といわずに、恵という。智日といわずに恵日と言ってある。それは、やっぱり恵というのは根本智。無分別智という意味、般若という意味だ。般若ということ、恵という字で翻訳している。智と恵と一緒に使う場合がありますが、区別すれば、恵の方は般若。それから智の方はこれは、ジュニャーナ(jaṇa)。般若はブラジュニャー(prajñā)。智の方は、ジュニャーナという言葉であらわす。闍那と発音を写す。こちらの方は般若。プラジュニャーです。音を写して般若。もとの字が違うんだ、智と恵とは。意味はどういうかという、こっち(恵)の方は破るんですね。妄想、妄念を破ってしまう。否定や。こっち(智)の方は何かというと、転ずる。智恵の用ぎというのは、破ることと転ずるということと二つの用ぎがある。転ずるのは御はからいなんです。智恵の御はからい。智がはからう前に、転ずる前に破っておかないと転ずるわけにいかんです。破れないままに転ずるというわけには

いかん。これは非常に大事なことです。無明の、我見我執を破ると。そのままのお助けといっても、我見のままで、そのままというのではない。我見を破るからそのままという。我見のままでそのままではない。そういう自分を固執している我見を破って、だからそこに、宿業とか煩惱とかそんなものを破るといつているわけじゃない。宿業煩惱は自然に転ぜらるんだ。ただそこに、自分のはからいというものを破らないといかん。はからいを破るということと、煩惱を破ることは、別なもののや。話はね。一緒にしたら何もわからないようになってしまふ。そういう意味で、「無碍の光明は無明の闇を破する」と、破ると書いてある。名号の智慧は、「悪を転じて徳をなすの正智」と、智の方は転じる。ちゃんと正しく区別して使ってある。こういうところから、仮名聖教でも何でも、広くいえば親鸞の場合、光ということが…、今日は時間がないから言えないけど。この次に続けてお話ししますけども、光ということの意味を考えてみなければならん。光というのは、願と光ということや。光ということをあらわしているけど、願はちょっとも出ていない。願は出ていない。願を説いているのは四十八願、經典だ。論は願をうけて光という。つまり願が成就したんだ、一心のところ。全部光である。だからして、二十九種莊嚴功德というけども、如来も光であり、浄土も光と、光ならざるはない。これはつまり何をあらわすかと言うと、光ということは、光をあらわすために光といっているんじゃない。願の満足ということをあらわそうとするんだ。本願が満足しているんだ。このことをあらわそうとしている。そうでないと、光に酔うたことになる。光に酔ってしまったえば、酒に酔うたのと同じことだ。信仰に酔うてしまえば、酔うたのは同じことじゃないか、酒に酔うたのと。だからして、光というものは、何も酔うたということであらわしたものでじゃない。満々たる光ということは、光ならざるはないということとは、本願の満足だ、仏心のね。だからして心光ということがある。攝取不捨の心光という字が使っている。攝取されるのは心光に攝取される。それはつまり大悲心の光である。願心の光だ。願心が満足した光。そういうことで、それを一心に得ている。一心というものが人間に成り立つときに、ここに本願の願心が満足する。満足して光となる。そしてその一心を発し

た衆生を撰取する。こういう構造なんです。

（本稿は、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年五月十六日午後の講義の筆録を整理したものである。文責編集部）

執筆者住所が掲載されているため  
リポジット非公開とする。